

～旧約聖書を読んで感じること～ (92) 王女ヨシエバ

イスラエルの王アハブの子ヨラム(Joram)の治世第五年に、ユダの王ヨシャファトの子ヨラム(Jehoram)が王となった。彼は三十二歳で王となり、八年間エルサレムで王位にあった。彼はアハブの娘を妻としていたので、アハブの家が行ったように、イスラエルの王たちの道を歩み、主の目に悪とされることを行った。(列下 8:18)

ヨラムは政略結婚で、アハブの娘アタルヤを妻としました。ヨラムとアタルヤの間に男児アハズヤが生まれました。ヨシエバもヨラムの娘に生まれた王女です。けれどもヨラムには側女が大勢いて、ヨシエバはアタルヤの実の娘ではないものと想像しますが、アハズヤとヨシエバは兄弟姉妹です。

アタルヤを妻にした後、ヨラムはアタルヤに影響を受け、王権のために兄弟を殺し、王位を安泰に保ったのです。歴代誌には「ヨラムは父の国を支配下に置いて勢力を増すと、自分の兄弟のすべてと、イスラエルの高官のうち何人かを剣にかけて殺した。(歴下 21:4)」と記されています。ヨシエバは、叔父たちが命を奪われた悲劇を知り、悲しみ、恐怖を味わったことでしょう。アタルヤへの嫌悪、父ヨラムへの軽蔑を抱いたことでしょう。王宮とは、権勢を窺う陰謀と、権力による流血が絶えない場なのでしょう。

ヨラムが病没したあと、若くしてアハズヤが王位に着きました。彼はベエル・シェバ出身のツィブヤとの間に一子いました。アハズヤは二十二歳で王となり、一年間エルサレムで王位にあった。その母は名をアタルヤといい、イスラエルの王オムリの子孫娘であった。アハズヤはこのようにアハブの家と姻戚関係にあったため、アハブの家の道を歩み、アハブの家と同じように主の目に悪とされることを行った。(列下8:26-27)



ヨアシュを救うヨシエバ Henri Leopold Levy

アタルヤの影響でバアルを祀り、エルサレム神殿はすっかり衰退していました。王女ヨシエバはエルサレム神殿の祭司ヨヤダの妻でした。表立った場には全く出ず、信仰を持って、夫ヨヤダと神殿を守っていたのでしょう。

アハズヤが若くして、イエフの剣に殺された時、遺児ヨアシュはまだ1歳の王子ですから、王になる年齢ではありません。アタルヤは、今度はアハズヤの異母兄弟、孫などユダの王族全てを殺すように命じ、ヨアシュもまさに殺されるころでした。母アタルヤの狂気の虐殺から、ヨシエバは何とか甥のヨアシュを助けました。母アタルヤは実権を握り、国を支配し始めました。ヨアシュは6年間神殿にかくまわれ、ダビデ家の伝統、主への信仰を教えられ、秘かに育てられました。ヨシエバは自分の子どもと一緒に大切に育てたことでしょう。モーセをナイル川から救い上げたファラオの王女を思い出します。

7年目にヨシエバの夫、祭司ヨヤダはダビデ家の血統を受けたヨアシュが正統なユダの王となるように、すべての段取りをつけました。ことが行なわれたのは、なんと安息日でした。安息日の出番に当たる兵を3組に分け、王宮を警備させ、非番の兵を呼び出し、神殿の中にいるヨアシュの警護に当たらせ、完全な防衛体制を組んで、即位式を挙行了たのです。安息日であれば、神殿には祈りのために出入りがある、と同時に穏やかに過ごすべき日でもありました。アタルヤは神殿には来ない、また、神殿に人が来るのは不思議ではないということで、この日にしたのでしょうか。

孤児であったヨアシュを愛し、特に日々の信仰生活を守ることによって、主と共にある平安の思いを伝えてきたのは叔母のヨシエバでした。ヨアシュは即位後も、叔父の指導のもとに、アタルヤに損なわれた神殿を修復し、身を低くして、穏やかに物事を処す王となり、40年間在位しました。ヨアシュは叔父、叔母の指導、愛があつての王でした。ヨヤダは長寿と尊敬を得、王の墓に葬られました(歴下24:16)が、ヨアシュは不安があつたのか、高官に惑わされ、謀反により殺害されました。